

## 構造的意味としての＜直接性＞

田 中 実

### 1. は じ め に

言語構造を認知する場合、近いものほどよく見える、という myopia の原理が働くことがある。例えば、

- (1) a. They loaded the wagon with hay.
- b. They loaded hay on the wagon.

通例、(1a) では「荷車いっぱい干し草が積まれた」、(1b) では「荷車の一部に干し草が積まれた」とそれぞれ解釈される。この違いは、wagon が動詞 load によって直接的に支配されているか否かによる<sup>(1)</sup>。すなわち、(1a) では load の対象が直接 wagon になっているので全体的解釈が、(1b) では wagon が load の間接的对象になっているので部分的解釈が施されるのである。

こうした問題は、言語構造の構成素間における「近さ」(closeness) の問題に還元することができる。事実、Cooper and Ross (1975), Lakoff and Johnson (1980), 安井 (1982), 池上 (1991) などでは、こうした点について言及されている。

しかしながら、本論で取り上げる構造的意味としての＜直接性＞という概念を正面切って取り上げて、言語構造間における意味の違いについて議論されたことはあまりなかったように思われる。

そこで、本論では構造的意味としての＜直接性＞という概念を導入することにより、幅広い範囲にわたる言語構造間の意味的相違の説明が容易になることをいくつかの補文の例を検討することによって明らかにしていきたい。

## 2. 「近さ」と＜直接性＞

本論に入る前に、まず、「近さ」と構造的意味としての＜直接性＞について触れておきたい。次のような例を見てみよう。

- (2) a. He snatched her handbag.
- b. He snatched at her handbag (but missed).
- (3) a. They searched him.
- b. They searched for him.
- (4) a. We found what we were looking for.
- b. We found out what he does for a living.

通例, (2a) では「彼が彼女のハンドバッグをひったくった」という動作の完了が表され, (2b) では「彼が彼女のハンドバッグをひったくろうとした(が, しそこなった)」という動作の試みが表される。これは, at の有無によって snatch と handbag との距離が (2a) では近い, (2b) ではそれほどではない, と認知されるからである。換言すれば, (2a) では at が無いぶん handbag が snatch の直接的対象になっているのに対して, (2b) では at が有るぶん handbag が snatch の間接的対象になっているのである<sup>(2)</sup>。

同様に, 通例, (3a) では「彼らは彼の体をじかに触ってボディチェックした」と解釈されるのに対して, (3b) では「彼らはくじかに触れられない, したがって, 目の前にはいない>彼の居所を探った」と解釈される。

こうした解釈の違いが生じるのは, for の有無によって, (3a) では him が search の直接的対象であり, (3b) では him が search の間接的対象になっているからである。つまり, (3a) では search と him との距離が近いのに対して, (3b) ではそれほどではない, と認知されるわけである。

また, (4a) では「私たちは探していたものを見つけた」, (4b) では「私たちは彼の暮らしの立て方を見つけてやった」ことがそれぞれ表される。つまり, 通例, find は具体的な対象を, find out は抽象的な対象を目的語として取るの

である。なぜか。

(4a) の場合、find と what 節との距離は近く、what 節が find の直接的対象となっているために、それはじかに触れられる具体的な対象である必要がある。他方、(4b) の場合、out の介入によって find と what 節との距離は (4a) ほど近くはなく、what 節が find の間接的対象となっており、それは必ずしもじかに触れられる具体的な対象である必要はない。

こうした構成素間における「近さ」の認知と、それらの間における直接的な結び付きの認知とは平行した現象であると言えよう。つまり、構成素間における「近さ」を認知することが可能であれば、そこに構造的意味としての＜直接性＞をも認知することが可能なのである。このことを確認するため、さらに、次のような例を見てみよう。

(5) a. The American ambassador baked a cake for James I.

b. \*The American ambassador baked James I a cake. — Green, 1974, 107.

(6) a. She's going to sing a song for her late lover.

b. \*She's going to sing her late lover a song. — Ibid. 109.

(5a,b) (6a,b) はそれぞれ、二重目的語構文であるが<sup>(3)</sup>、(5b) (6b) は通例、容認されない。これはなぜであろうか。

Green (1974: 107, 109) によれば、二重目的語構文では主語と目的語の指示物は動詞によって示される時点において同時に存在しなければならない。そこで、(5b) (6b) ではそれぞれ、James I 世の時代に（アメリカ）大使が存在すること、生きている人間が亡くなった恋人と同時に存在するということなどは到底考えられないので、(5b) (6b) は容認されない。

他方、(5a) (6a) は、例えば、（アメリカ）大使が James I 世の霊に捧げるためにケーキを焼く場合とか、人が亡き恋人の霊に捧げるために歌を歌うといった場合には容認される。

なぜ、主語と目的語の指示物は同時代に存在しなければ、(5b) (6b) のような構文は容認されないのか。また、(5a) (6a) が容認可能であるのは、なぜ、

上のような場合においてのみなのであろうか。

そこで、(5a, b) (6a, b) を見てみると、主語と（有生）目的語との「近さ」が問題になる。すなわち、(5a) (6a) では主語と（有生）目的語との距離は、(5b) (6b) に比べて、近いとは言えない。換言すれば、(5a) (6a) では主語と（有生）目的語との間に間接的な結び付きが認知されるのに対して、(5b) (6b) では両者の間に直接的な結び付きが認知される。その場合、(5a) (6a) では主語から（有生）目的語に間接的な働きかけがなされ、直接生きている対象ではなく間接的に霊的な対象に行為が施される、と解釈される。他方、(5b) (6b) では、主語と（有生）目的語との間に構造的意味としての＜直接性＞が認知されるが、生きている動作主が死んでいる被動作主に直接行為を及ぼすことは到底不可能であり、構造的意味と構成素の指示物との間の矛盾により容認不可能となるのである。

### 3. 補文構造における＜直接性＞

Riddle (1975: 155-6, 161-2) は、語用論的観点から動詞が to 不定詞と that 節を従える場合の違いを説明しようとする。例えば、

(7) a. Jane pretended to be an acrobat.

b. Jane pretended that she was an acrobat. — Riddle, 1975, 155-6.

(8) a. Jane knows her to be intelligent.

b. Jane knows that she is intelligent. — Ibid., 161-2.

(7a, b) はいずれも、「Jane はアクロバットのふりをした」という意味であるが、(7a) は「実際に跳んだり跳ねたりする」場合、(7b) は例えば「ベッドの中で頭に浮かべる」ような場合と区別される。つまり、この場合、不定詞補文は「行動」を、that 補文は「心的状態」をそれぞれ指す。こういう違いを、次の例は如実に示している。

(9) When we were very small we pretended the water in the ditch was a river; pretended to be afraid of it. — J. C. Oates, 'Puzzle'

(9)は「子供の頃、私たちはどぶを流れる水を川だと想像し、実際にそれが恐いというふりをした」というのである。

他方、(8a, b) はいずれも、「Jane には彼女が賢いことがわかる」という意味であるが、(8a) ではそれは Jane の「主観的判断」であり、(8b) では「客観的判断」であると区別される。

なぜ、そうなのか。(7a) (8a) と (7b) (8b) とではそれぞれ、pretend と acrobat, know と intelligent の間で、前者のほうにより直接的な結び付きが認知される。そこで、(7a) (8a) ではそれぞれ、Jane が「直接＜すなわち、実際に＞アクロバットのふりをしてみせる」、Jane が「直接的に＜すなわち、主観的に＞彼女が賢明であるとの判断を下す」ことになる。他方、(7b) (8b) では、(7a) (8a) ほど構成素間の結び付きが直接的ではないので、それぞれ、アクロバットのふりをするのはあくまで間接的に「頭の中での想像だけ」であり、彼女が賢いことを知っているのも、それはあくまで Jane の「間接的＜すなわち、客観的＞」手段によるものであるにすぎない。

こうした構造的意味としての＜直接性＞の認知による、構文上の相違の説明は、次のような例においても可能である。

(10) a. I chose Mary to lead the parade.

b. I chose for Mary to lead the parade. — Dixon, 1991, 42.

(11) a. I found Mrytle to be in the pink of health.

b. ??I found Mrytle to be in the office. — Steever, 1977, 591.

Dixon (1991: 42) によれば、(10a) では「私がパレードの参加者の前に立って、Mary がパレードを先導するようにと直接、Mary のことを名指しした」のであり、(10b) では「パレードの主催者として Mary がパレードを先導するようにという私の決定をまず、Mary 以外の人に伝え、その人が最終的に Mary にそれを伝えた」のである。なぜ、こういうことが言えるのであろうか。

それは、(10a) は (10b) とは異なり、補文標識の for が無いため、choose と Mary との間で構文上の＜直接性＞が認知されるからである。

他方、(11a) は「Mrytle は健康そのものであることがわかった」という意味

で容認可能であるのに対して、(11b)は「Mrytle はオフィスにいることがわかった」という意味では容認可能性が著しく低い。この理由について、Steever (1977) には言及は見られないが、(11a, b) を見てみると、両者ではともに構造的意味としての＜直接性＞は認知されるが、不定詞補文の中身とそれとが (11a) では整合するのに対して、(11b) では整合していないことがわかる。すなわち、「Mrytle が健康であるか否か」は主語（すなわち、話し手）の直接認知の対象であり、主観的に把握することができるのに対して、「Mrytle がオフィスにいるか否か」は主語（すなわち、話し手）が必ずしも主観的に把握する対象ではなく、客観的に（すなわち、直接的でなくても間接的に）把握することも可能な対象である。換言すれば、(11a) では構造的意味としての＜直接性＞と補文の Mrytle の「健康状態」とが整合するのに対して、(11b) では構造的意味としての＜直接性＞と補文の Mrytle の「オフィスでの滞在」とが必ずしも整合するとは限らないのである。

こういう構造的意味としての＜直接性＞と補文の中身との整合性が問題になるのは、次のような例の場合も同様である。

(12) a. I supposed him (to be) dead/sick.

b. I supposed him to be clever/tall/rich/alive. — Dixon, 1991, 136.

(12a) での to be は随意的であるが、(12b) でのそれは義務的である。なぜであろうか。

(12a) での dead である状態、sick である状態はそれぞれ、われわれが直接的に把握することも、間接的に把握することも可能な対象である。もし、「彼の死」「彼の病気」を直接的に把握する場合、構造的意味としての＜直接性＞を明示するため、to be の削除が必要になるし、もし、そうでなければ、to be の削除の必要はない。

他方、(12b) での clever であること、tall であること、rich であること、alive であることは、通例、間接的（あるいは客観的）に把握することのできる対象であり、to be の削除は一般的ではない。

このことに関連して、次のような例では、構造的意味としての＜直接性＞

<間接性>を明示する to be の有無によって、補文の中身というよりはむしろ、主文の動詞に意味の違いをきたしている。

(13) a. I can't imagine him sick.

b. I can't imagine him to be sick.

(13a) は「彼が病気であるなどと想像もつかない」という意味であり、(13b) は「彼が病気であるなどと信じられない」という意味である。つまり、(13a) の imagine は「心に描く」、(13b) の imagine は「信じる」ことを意味するのである。なぜであろうか。

to be が無い (13a) では、構造的意味としての<直接性>が認知されて、対象（「彼が病気であること」）がじかに把握され、心に直接投影される。他方、to be の有る (13b) は、(13a) ほどは構文上、直接的ではなく、対象（「彼が病気であること」）が距離を置いて把握され、客観的判断の対象にされている。そこで、われわれは imagine にそれぞれ「心に描く」「信じる」といった解釈を施すと考えられる。

ところで、(12a, b) と同様な構文は、次のような例にも見られる<sup>(4)</sup>。

(14) a. They appointed him president.

b. They appointed him to be president. — Wierzbicka, 1988, 54.

(14a, b) はいずれも、「彼らが彼を会長に任命した」という意味である。しかしながら、Wierzbicka (1988: 54) では、(14a) は「彼の意志にかかわりなく、彼らは直接、彼を会長に任命した」のに対して、(14b) は「彼の意志を尊重して、彼らは間接的に彼を会長に任命した」と区別される。

これは、(14a) では to be が無く、構造的意味としての<直接性>が認知されるので、彼らの「任命行為が相手の意志の介入なしに直接的に遂行された」と把握されるからである。それに対して、(14b) では to be が有るため、相手の意志が介入し、「任命行為は間接的にしか遂行されなかった」と把握されるのである。

こうした例と平行して、補文標識 to の有無による意味の違いが生ずる例は、次のような場合にも見られる。

(15) a. I've never known him sing so beautifully before.

b. I've never known her to tell lies. — 中右, 1980, 143.

(16) a. He helped me climb the stairs by propping me up with his shoulder.

b. He helped me to climb the stairs by cheering me on. — Bolinger, 1974, 75.

中右 (1980: 143) によれば, (15a) は「以前に彼があんなに美しい声で歌うのを見聞きしたことがない」という意味であり, know は直接的な知覚作用を表す。他方, (15b) は「彼女が嘘をつくというようなことは知らなかった」という意味であり, know は通例の認知作用を表す。つまり, (15a) の to 無し不定詞補文が具体的現象を叙述しているのに対して, (15b) の to 付き不定詞補文は抽象的観念を叙述しているのである。

こうした主文の動詞 know の「見聞きして知っている」「事実・真実などを知っている」といった意味の違いは, to の有無による構造的意味としての＜直接性＞の認知が可能か否かによる違いであると言える。

他方, (16a, b) に関して, Bolinger (1974: 75) は, (16a) では「彼が私を肩で支えて階段をのぼるのを助けてくれた」という意味で直接的援助が, (16b) では「彼が私を励まし続けて階段をのぼるのを助けてくれた」という意味で間接的援助が表されているとする。

こうした違いも, 本論では to が無いことによる構造的意味としての＜直接性＞の認知が可能な (16a) に対して, (16b) ではそれが不可能であることによって生じるとする立場を取る<sup>(5)</sup>。

#### 4. 結びにかえて

構造的意味としての＜直接性＞という概念を導入して, いくつかの補文の意味的相違を検討してきた。

こうした＜直接性＞という概念は, 言語構造間においてわれわれが相対的に



認知する対象である。したがって、(17a～c) のような補文（あるいは、一部は小節）を伴う構造においては、順に＜直接性＞の度合いは増していく。

- (17) a. I find that this chair is uncomfortable.
- b. I find this chair to be uncomfortable.
- c. I find this chair uncomfortable. — Borkin, 1984, 79.

(17a～c) では、(17c) の構造的意味としての＜直接性＞の度合いが最も高いと認知されるので、「＜直接、椅子に座ってみて＞この椅子は座り心地が良くないと思う」という解釈が施される。逆に、(17a) のそれは最も低いと認知されるので、「＜間接的に人から聞いたりして＞この椅子は座り心地が良くないと思う」という解釈が施される。したがって、その中間に位置する (17b) はいずれの場合にも解釈されうる。

ここで一つの見通しを述べるなら、構造的意味としての＜直接性＞という概念は、本論で検討した補文の例のみならず、幅広い範囲の例に対する説明原理にもなりうるものと思われる。例えば、

- (18) a. Down the stairs rolled a ball.
- b. Down the stairs there rolled a ball. — Coopmans, 1989, 748.
- (19) a. I haven't any money.
- b. I didn't have any money.
- c. \*I hadn't any money.
- (20) a. You are right.
- b. You are in the right.

(18a) と (18b) とでは、構造的意味としての＜直接性＞は there の無い (18a) におけるほうがより高いと認知される。そこで、(18a) では「＜直接、目の前で＞階段をボールが転げ落ちた」、(18b) では「＜実は＞階段をボールが転げ落ちたんだ」と解釈される。つまり、(18a) は眼前の出来事のように報告する場合、(18b) は過去の出来事を相手に想像させるように言う場合に適している。

では、(19a～c) の場合はどうか。なぜ、(19c) のみ通例、容認されないので

あろうか。

(19a) のような「現在」と (19b, c) のような「過去」とを比べてみた場合、Reichenbach (1947) 流に言えば、「現在」(———<sup>|</sup>————→) は発話時 (point of speech=S)・事件時 (point of event=E)・基準時 (point of reference=R) が同時的であり、「過去」(———<sup>|</sup>————→) は S が E, R に先行している。つまり、「過去」については S と R, E との間の距離があり、事柄を間接的にしか把握することができないのである。

そこで、次に (19b) と (19c) とを比べてみると、構造的意味としての＜直接性＞の度合いが高いのは (19c) のほうであり、間接的に事柄を把握する「過去」時制の文脈では (19c) はふさわしくない。逆に言うと、「過去」時制のような間接的な文脈では構造的意味としての＜直接性＞の度合いが低い (19b) のような迂言的表現 (hadn't ではなく didn't have) を用いるのが適しているのである。

さて、(20a, b) について見てみると、通例、(20a) は「君のいま言ったことに誤りはない」、(20b) は「君の言い分は正しい」と解釈される。つまり、直接的な意味合いが強いのは (20a) のほうであると言える。こうした直接的な意味合いが生じるのは、(20a) と (20b) とを比べてみた場合、in the の有無によって構造的意味としての＜直接性＞が高いのは (20a) のほうであると把握されるからである。

#### 注

- (1) 安藤 (1991: 258) では、このような場合に構造的意味の一つとしての＜支配性＞の有無に言及されている。
- (2) (2a, b) のように at の有無によって「動作の完了」と「動作の試み」といった違いを示す一連の動詞として snatch 以外に catch, grasp, shoot, strike などがある。
- (3) 二重目的語構文については、従来、Green (1974) をはじめ、Allerton (1978), Hawkins (1981), Larson (1988) などによるそれぞれの立場からの論究があるが、本論で主張するような構造的意味としての＜直接性＞という概念による明確な扱いにはそれらには見られない。

- (4) (14a, b) のような例に関する, 本論とは別の角度からの考察については田中 (1994) を参照。
- (5) (16a, b) のような例に関する, 本論とは別の角度からの考察については田中 (1994) を参照。

### 参 考 文 献

- 安藤貞雄 (1991), 「児玉徳美著『言語のしくみ』」『英語青年』8月号, p. 258.
- Allerton, D. J. (1978), 'Generating indirect objects in English' *Journal of Linguistics* 14: 1, pp. 22-33.
- Bolinger, D. (1974), 'Concept and percept: two infinitive constructions and their vicissitudes' *World Papers in Phonetics: Festschrift for Dr Onishi's Kiju*, pp. 65-91.
- Borkin, A. (1984), *Problems in form and function* (Ablex)
- Cooper, W. E. and J. R. Ross (1975), 'World order' *Functionalism*, pp. 63-111.
- Coopmans, P. (1989), 'Where stylistic and syntactic processes meet: locative inversion in English' *Language* 65, pp. 728-751.
- Dixon, R. M. W. (1991), *A new approach to English grammar, on semantic principles* (Oxford Univ. Press)
- Green, G. M. (1974), *Semantics and syntactic regularity* (Indiana Univ. Press)
- Hawkins, R. (1981), 'On "Generating indirect objects in English": a reply to Allerton' *Journal of Linguistics* 17, pp. 1-9.
- 池上嘉彦 (1991), 『＜英文法＞を考える』(筑摩書房)
- Lakoff, G. and M. Johnson (1980), *Metaphors we live by* (The Univ. of Chicago Press)
- Larson, R. K. (1988), 'On the double object construction' *Linguistic Inquiry* 19, pp. 335-391.
- 中右 実 (1980), 「テンス, アスペクトの比較」『日英語比較講座第2巻文法』(大修館書店), pp. 101-155.
- Reichenbach, H. (1947), *Elements of symbolic logic* (Free Press)
- Riddle, E. (1975), 'Some pragmatic conditions on complimentizer choice' *CLS* 11, pp. 467-474.
- Steever, S. B. (1977), 'Raising, meaning and conversational implicature' *CLS* 13, pp. 590-602.
- 田中 実 (1994), 「to の機能」『関西学院大学文学部60周年記念論文集』, pp. 155-167.

Wierzbicka, A. (1988), *The semantics of grammar* (John Benjamins)

安井 泉 (1982), 「英語の統語構造における図像性について」『言語文化論集』13,  
pp. 109-140.

— 文学部教授 —